



木造家屋が空襲で焼き払われ、  
焦土と化した新橋周辺の航空写真。  
手前が新橋駅、  
東京湾に向け汐留や浜離宮、  
築地などが広がる  
(所蔵：港区立郷土歴史館)

# 港区戦争・戦災体験集 パネル展

近代化を進めながら、外国との戦争を重ねてきた日本。  
ついに国民すべてを巻き込む総力戦へと踏み込んで、  
惨たんたる敗戦を迎えます。

当時、芝区・麻布区・赤坂区に分かれていた港区も、  
ほとんどが焼け野原となり、  
多くの人が生命や家族や財産を失いました。

戦争中、港区で何が起き、  
そのなかで人々はどう生き抜いたのか。  
かつての戦争を振り返ることで、

現在と未来の平和についてあらためて考えてみましょう。

戦後80年、港区平和都市宣言40周年の節目に発行した  
「戦争・戦災体験集（第4集）」を展示用パネルに再編集しました。



# 歩兵第三連隊全隊覽



歩兵第三連隊の兵舎を描いた図。昭和6(1931)年刊行  
(所蔵：港区立郷土歴史館)

## 港区と軍隊

東京都港区はかつて、芝区・麻布区・赤坂区の3区に分かれていました(明治11「1878」年～昭和22「1947」年)。この地域には、幕末の安政6(1859)年に麻布善福寺にアメリカ公使館が設置されたのを最初として、各国の公使館や宿舎が置かれました。海が近く、かつ江戸城からも適度な距離で、立派な建物を有するお寺を間借りできたということが関係するようです。その後も増え続け、麻布を中心に国際色豊かな地域となりました。令和7(2025)年3月1日時点で、81か国の大使館が港区に置かれています。また、かつては武家屋敷も多かったことから、皇族や華族、有力官吏(官僚)や政治家、実業家の屋敷が多数所在するお屋敷街へと発展しました。

それ以外に大きな特徴といえるのが、麻布・赤坂に軍関係の施設が密集していたことです。陸軍の司令部や兵舎の他、練兵場もあり、東京における陸軍の拠点でした。しかし今日では、ほとんど面影は残っていません。



# 港区の空襲



豪華な彩色や彫刻が施された、絢爛たる建物が並び増上寺の徳川家霊廟も、空襲を受けて焼失した  
(所蔵：港区立郷土歴史館)

## 昭和20（1945）年 3月10日の空襲

「東京大空襲」として知られるこの空襲では、上野、浅草、深川などの「下町」が焼き尽くされ、一晩でB29が300機以上来襲、1千500トン以上の焼夷弾を落とし、約10万人の死者、100万人以上の罹災者が出たとされています。この時港区でも、赤坂区檜町や青山一帯、麻布区飯倉から三河台町にかけて大きな被害を受けました。

一晩にして計10万人以上の死者が出たといわれるこの空襲での芝・麻布・赤坂の3区内の被害は、死者100人以上、4千戸以上の焼失というものでした。

## 昭和20年 5月24、25日の空襲

「東京山の手大空襲」として知られる2日間にわたる空襲は、24日が約560機のB29、投下された焼夷弾は3千600トン余り、25日は約500機、3千300トン余りと記録され、3月10日の空襲よりも徹底した爆撃で、赤坂や青山などの

東京の「山の手」（高台）が標的でした。死者は両日を合わせ、東京全体で4千人余り。東京大空襲に比べて死者が少なかったのには、いくつかの原因が指摘されています。住宅が密集している下町に比べ、山の手は住宅街は密度が低かったこと、下町は川が多く避難が困難であったが、山の手は起伏に富み、延焼が拡大しにくかったこと。また3月の空襲を教訓に、建物を強制的に取り壊して延焼を予防する「建物疎開」が行われていたこと、「防空法」という法律に基づく、市民の消火義務よりも避難を最優先する当局の方針転換などが挙げられています。

とはいえ、芝・麻布・赤坂の3区を合わせて約750人の死者を出し、焼失家屋は約3万4千戸、一帯は焼け野原となりました。宮城と呼ばれていた皇居や霞ヶ関の官庁街などが焼失したのはこの時で、芝区では、増上寺の五重塔や徳川家の霊廟などが焼け落ちました。表参道付近ではたくさんの方が逃げ遅れ、安田銀行（現・みずほ銀行青山支店）の前には死体の山ができたといわれています。



# 港区における勤労働員・学童疎開

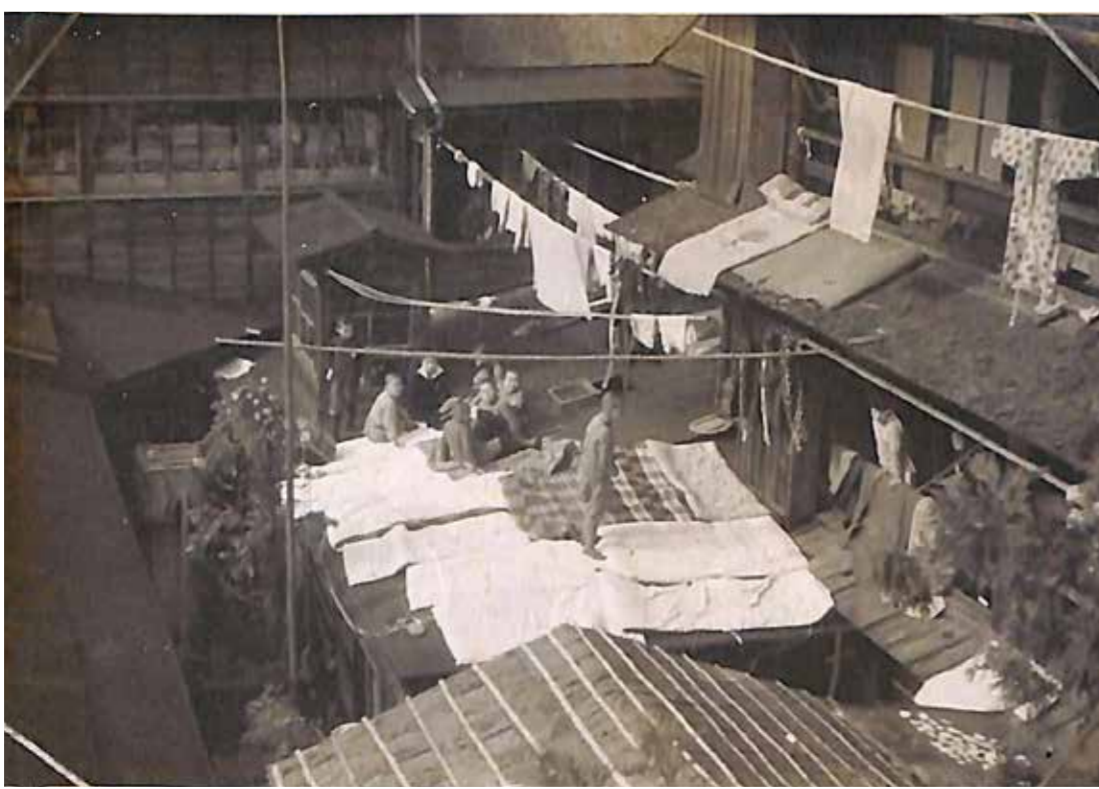


塩原へ疎開した桜田国民学校の児童。『塩原疎開』より（『デジタル港区教育史』公開資料）

令和7（2025）年3月1日現在、港区立の小学校は、統廃合が進み19校になっていますが、戦中には国民学校と呼ばれていた小学校が芝区に16校、麻布区に7校、赤坂区に5校、計28校ありました。これら全てが、昭和19（1944）年から20（1945）年にかけて集団疎開を行いました。

芝区内の国民学校は、栃木県塩谷郡の塩原温泉や鬼怒川温泉に疎開し、ほとんどが温泉旅館を宿舎としました。麻布区の場合は栃木県南部の佐野、足利一帯の寺院が主な疎開先となりました。赤坂区は東京都北多摩郡の村山、小平、清瀬、府中、国分寺、神代（現・調布市）、谷保（現・国立市）などの一帯の寺院や学校施設が使用されました。

区内の中学生以上は勤労働員を経験しました。詳しい記録はまとまっていませんが、芝区三田綱町にあった慶應義塾普通部（旧制中学相当、現・慶應義塾中等部の場所であり戦後横浜市に移転）の場合、昭和19年中には海軍や東京市の関連施設や区役所などでの物資の運搬、防空壕掘り、民間工場での戦車のキャタピラ・零戦の部品作りなどに動員されました。中には風船爆弾の製造を手伝った生徒たちもいました。昭和20年に入り空襲が激化してくると、建物の強制疎開や救援物資の配布、焼け跡整理などの作業が増えていき、空襲犠牲者収容を手伝った例もあったようです。



1. 屋根の上で日光浴。



2. 午後8時半に就寝、午後9時消灯



3. 勤労働士の薪運び

1. 2. 3. 『東京都桜田国民学校集団疎開学園写真集』より（『デジタル港区教育史』公開資料）



# 港区の戦後復興

## 闇市となった新橋駅前

昭和20（1945）年、戦争は終わりました。しかし人々の衣食住は相変わらず窮乏の中でありました。特に食料の欠乏は、むしろ戦後激しさを増していきました。食料の配給制は維持され、兵隊からの復員や外地からの引き揚げ者によって人口が増加したことで、物資は完全に不足してしまいました。そのため統制を逃れて違法に物品を売買する闇市が各地に出現しましたが、全国でも最大といわれたのが新橋駅前の強制疎開による広場を占拠して出現した闇市でした。

## 引き揚げの玄関だった品川駅

港区にはもう一つ、戦後を象徴する風景がありました。兵役を終えて復員した兵士や、満州などからの引き揚げ者、シベリア抑留からの帰還者などが、品川駅（港区内にある）に到着したからです。

## 戦後日本のさまざまな舞台に

GHQは港区でどのような足跡を残したのでしょうか。日本に到着したアメリカ軍は、旧日本軍の施設や、堅固で大きな建物を強制的に接收して使用しました。個人宅も例外ではなく、麻布や白金の住宅街には接收された家がありました。銀座の服部時計店（現セイコーホールディングス）の創業者服部金太郎はっとりきんたろうにより昭和8（1933）年に建設された白金三光坂上の大邸宅、通称「服部ハウス」もGHQによって接收され、極東国際軍事裁判（東京裁判）のキーンン首席検事らが使用しました。昭和23（1948）年には、憲兵らが嚴重に警備する中で3カ月にわたって東京裁判の判決文の翻訳が行われたことで知られています。またそれに先立ち、日本国憲法がGHQ民政局によって起草されたのもここであったといわれています。



新橋駅から見た闇市の様子（所蔵：港区立郷土歴史館）  
建物疎開で空き地が広がっていた新橋駅前にできた、闇市と呼ばれる露天商人による青空市場・マーケット。とくに食品が豊富だったという



# データでみる 空襲の被害

## 図解・B29爆撃機

全長：約30.18m  
全幅：約43.06m  
全高：約8.5m

詳細なデータは型式により異なります

乗組員：6人  
爆撃手・パイロット・  
副操縦士・機関士・  
航法士・通信士

最大搭載燃料：  
約35,000リットル

最大航続距離：  
約5,230km～約6,600km

飛行高度：約10,000m

乗組員：4人  
右側面銃手・左側面銃手・上銃手・  
レーダーオペレーター

最大爆弾搭載量：約9t  
(大型焼夷弾40発分)

乗組員：1人  
尾部銃手

日本の高射砲は高度1万メートルを飛行できるB29には届かず、  
迎撃できる戦闘機もほぼありませんでした。

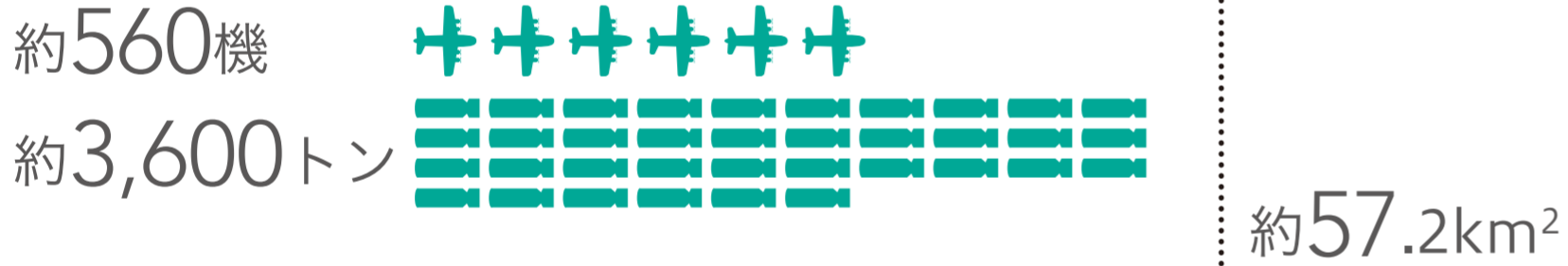
## 東京の主な大空襲

✦ B29 飛来数    🚒 投下された焼夷弾    🔥 消失面積

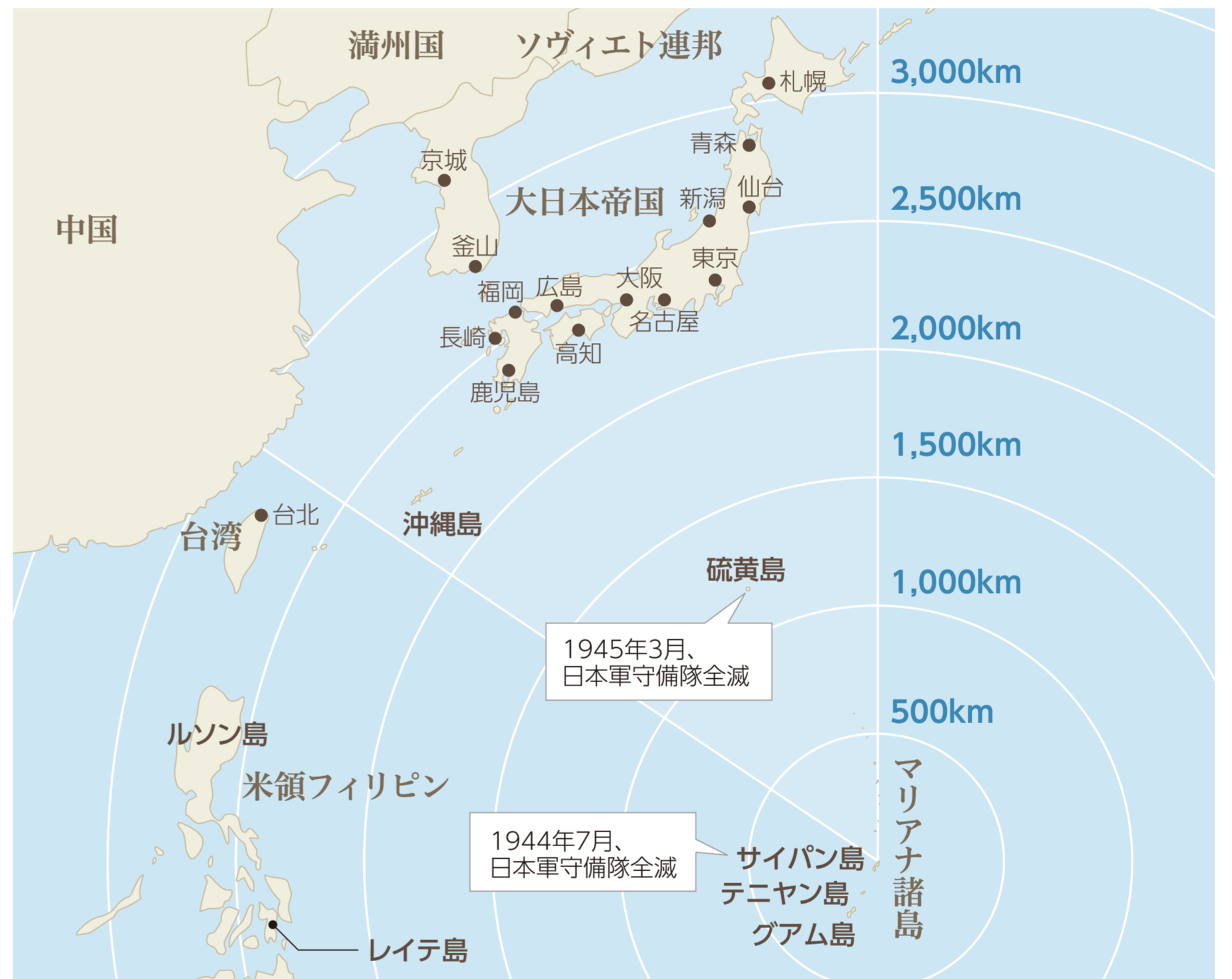
3月10日「東京大空襲」



5月24日「東京山の手大空襲」



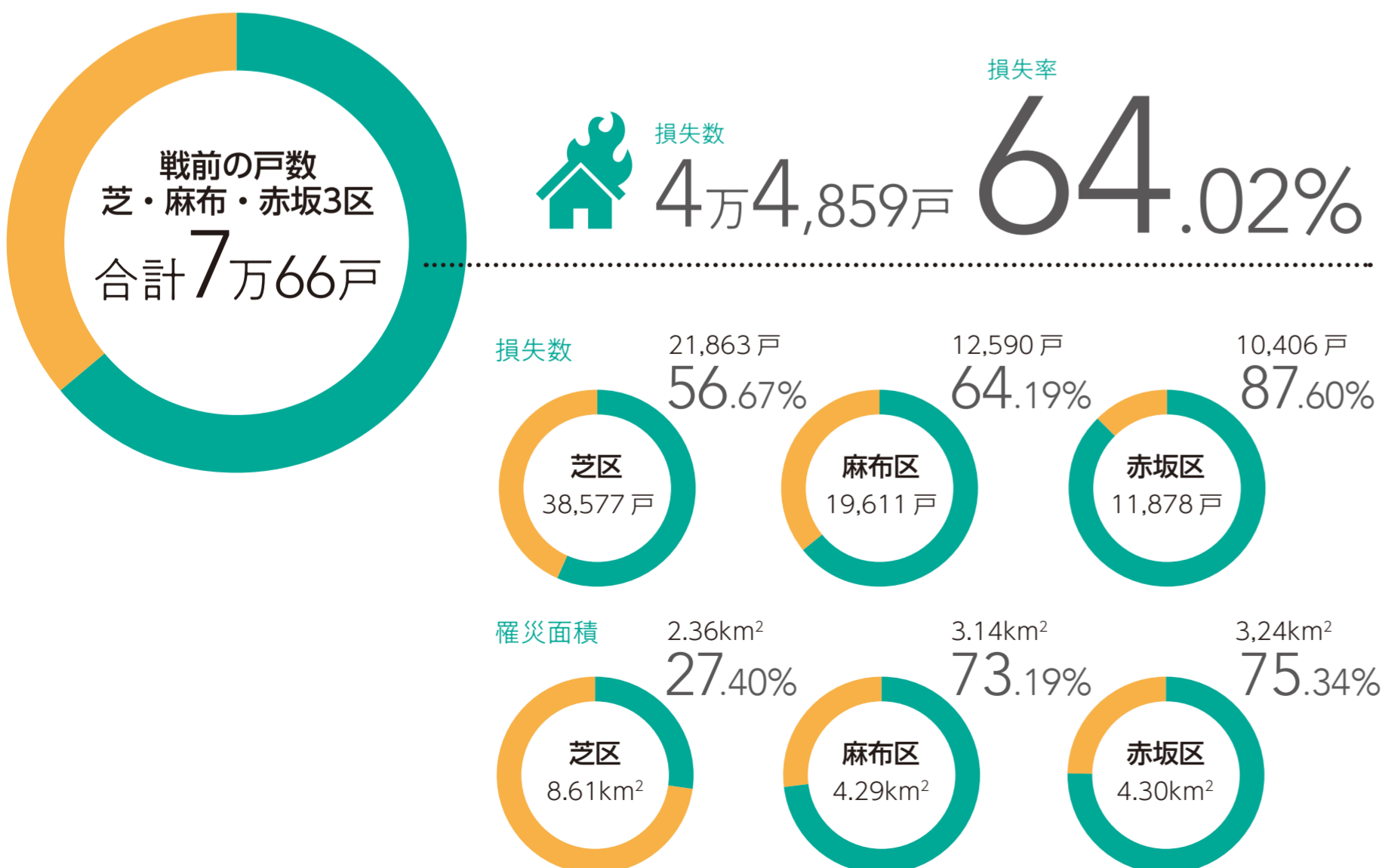
5月25日「東京山の手大空襲」



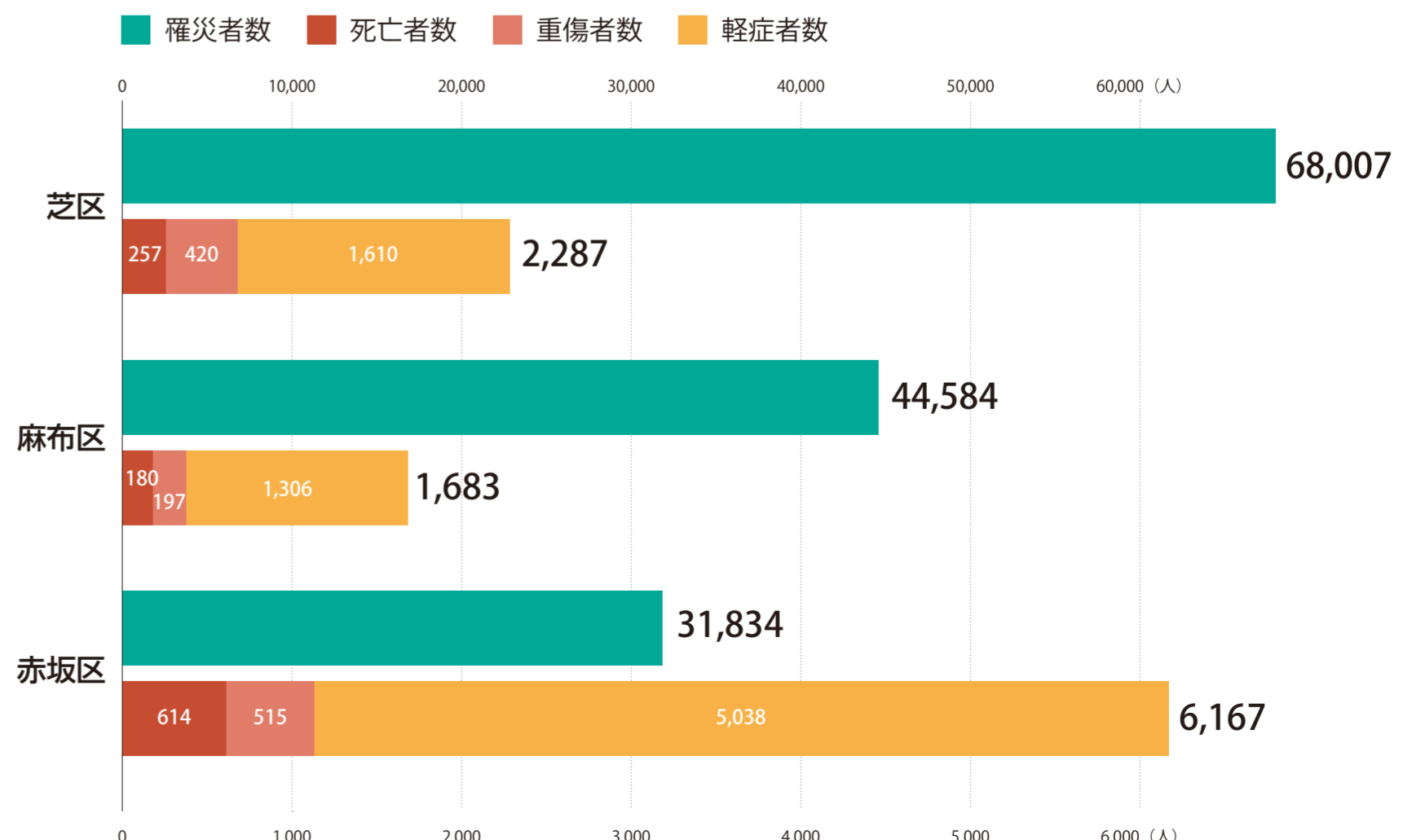
## 芝・麻布・赤坂3区の戦災被害

出典：『新修港区史』下巻(割合は再計算しました)

### 家屋の損失



### 人的被害



# 地図でみる 空襲による焼失区域と建物疎開区域

■ アメリカ軍の空襲による焼失区域  
■ 防空法及び都市計画法に基づく建物疎開区域

作図上の基礎資料として港区立三田図書館資料室及び港区役所建設部管理課保存の焼失区域図、疎開区域図等を使用し、不明の箇所については多くの区民の方のご教示により、できる限り補正しましたが、再確認あるいは訂正を要すると思われる区域が残っていることを付記します。

なお、この地図は、現在の地図に焼失区域と建物疎開区域を表示しているため、昭和19(1944)年～20(1945)年当時の道路幅や区画等と異なっている箇所があります。



## 『東京都戦災誌』より

戦前戸数及び人口 (調査年月日不明)

	戸数	人口
芝区	38,577戸	167,052人
麻布区	19,611戸	87,957人
赤坂区	11,878戸	52,042人
<b>以上合計</b>	<b>70,066戸</b>	<b>307,051人</b>

なお、『昭和19年人口調査』(総理府統計局編・昭和19年2月22日実施)によれば三区合計の人口は291,997名となっている。

## 昭和20年4月20日現在の人口

	世帯数	人口
芝区	31,558世帯	105,000人
麻布区	15,885世帯	55,363人
赤坂区	10,138世帯	32,853人
<b>以上合計</b>	<b>57,581世帯</b>	<b>193,216人</b>

## 昭和20年5月27日現在の戸数及び人口

	戸数	世帯数	人口
芝区	11,500戸	17,300世帯	58,600人
麻布区	1,760戸	2,518世帯	7,678人
赤坂区	220戸	335世帯	1,000人
<b>以上合計</b>	<b>13,480戸</b>	<b>20,153世帯</b>	<b>67,278人</b>

なお、『昭和20年人口調査』(総理府統計局編・昭和20年11月1日実施)によれば、芝区：67,116名、麻布区：20,697名、赤坂区：8,791名、三区合計人口96,604名となっている。

昭和22年 人口164,966名、世帯43,292  
 昭和53年(8月1日) 人口200,202名、世帯87,980

## 空襲被害戸数(全半壊、全半焼)及び被災率

	戸数	被災率
芝区	21,863戸	56.5%
麻布区	12,590戸	60.4%
赤坂区	10,406戸	83.7%
<b>以上合計</b>	<b>44,859戸</b>	
三区全体の建物の被災率 (この数字には建物疎開による倒壊家屋は含まれていない。)		64.0%

『新修港区史付図 その2』を一部調整の上転載



戦争の時代とつながっている街を歩く

# 港区戦争史跡めぐり

東京山の手大空襲の記憶が刻まれた道

## 表参道

表参道や青山通りの一帯が火の海となったのが、

昭和20（1945）年5月24・25日の東京山の手大空襲です。

来襲したB29は約500機、投下された焼夷弾は

約3000トン以上と、3月10日の東京（下町）大空襲よりも

規模は大きく、たくさんの人々が

逃げ場を失って火に巻かれました。



### 2基の大石灯籠

待ち合わせ場所として知られる、参道の入り口の石灯籠の台座が、ところどころ欠けているのは、爆撃によるもの。黒ずみは、焼けた人の脂によるものといわれています。

■北青山3-5（表参道交差点付近）

周辺はすべて焼け野原になり、このあたりに立つと、東に国会議事堂、西には富士山の姿が、遮るものなく見えたそうです。

### 区政六十周年記念碑「和をのぞむ」

区政60周年を機に、平和を願って建立された記念碑。毎年5月25日には、追悼の献花が行われています。また、近く善光寺には、犠牲者が多かった銀行前の土を移して供養塔が設けられ、やはり同日に法要が営まれています。

■北青山3-6-12

空襲のあと、表参道や青山通り沿いには、いたるところに遺体が並べられ、行方がわからない身内を探す人たちが、一体一体確かめて回っていました。それらの遺体は、逃げる姿のままだったり、座り込んで拝むような姿だったり、幼児を胸に抱いたままの姿だったりしたそうです。



### 表参道ケヤキ並木

参道の両側に植えられていた200本のケヤキも、焼夷弾によって燃え上がり、13本を残して消失しました。現在の並木のほとんどは、戦後に若木が植え直され育ったものです。



提供：東京都立中央図書館



### みずほ銀行青山支店（旧安田銀行青山支店）

空襲の夜、堅牢な銀行の建物へ逃げ込もうとした多くの人たちが、中へ入れず亡くなりました。壁沿いに遺体がうずたかく積み上がったのは、大規模な火災によって起きる竜巻のような強風のためともいわれています。

■北青山3-5-27

翌日、黒く焦げた遺体を、鳶口（とびくち：木の柄にくちばしのような金具のついた道具）で壁から一体ずつ引きはがすたびに、ポツと火が燃え上がったそうです。それらの遺体は、スコップで投げ入れるようにトラックへ積み込まれ、運ばれていったといわれています。

### 山陽堂書店

今も続く老舗書店。周辺で数少ないコンクリート造りだった建物へ、100名近い人たちが逃げ込みました。もともと豆腐屋があった場所で、地下に井戸があったため、そこから水をバケツリレーで運び、建物の内側から消火したそうです。

■北青山3-5-22



昭和6（1931）年の山陽堂書店（提供：山陽堂書店）

地上3階・地下1階の建物は、関東大震災の教訓を踏まえて、ドアを重い鉄製にし、窓にも熱に強いガラスを用いるなど、火災への備えを意識して作られ、その耐火構造が、焼夷弾による火災から建物を守ったようです。空襲の高熱で熱くなった窓ガラスが、急に冷やすことで割れてしまわないよう、水を口に含み、霧のようにしてガラスに吹きかけたそうです。

東京（下町）大空襲で亡くなったのは約10万人、東京山の手大空襲では約3600人と、爆撃の規模に比べ、死者の数が下回ったのは、疎開が進み、すでに人口が減っていたことや、下町での空襲の様子がすでに伝わっていて、消火よりも避難を優先することが多かったためといわれています。

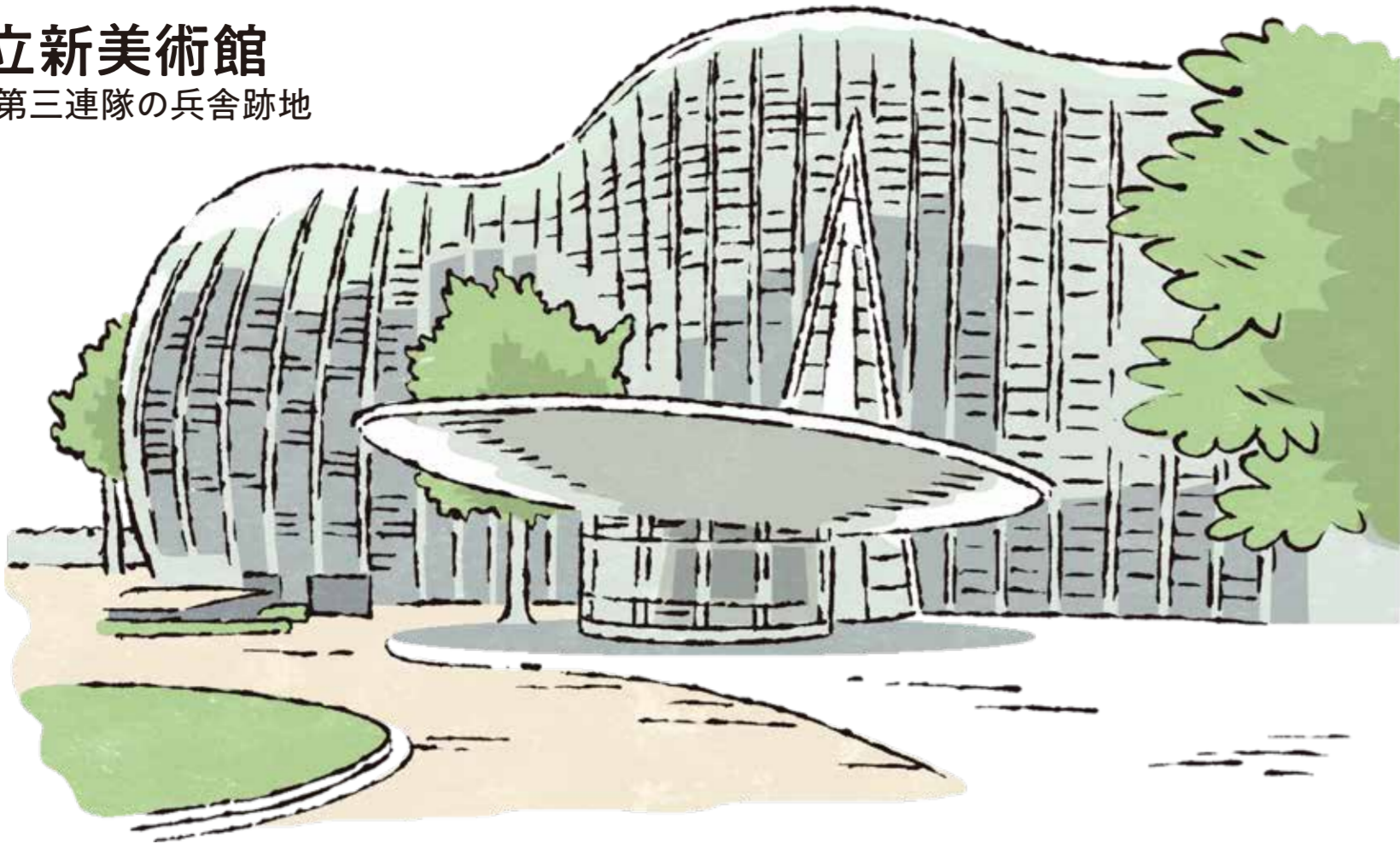


# 青山・赤坂・六本木

当時の港区には日本軍の重要な施設が各所にありました。なかでも、麻布区・赤坂区には4つの歩兵連隊と司令部や、陸軍大学校が置かれ重要施設が集中する陸軍の街でした。戦時中はそれらを標的とする激しい攻撃を受けます。戦後、軍の広大な跡地はGHQに接収されましたが、現在もまだ米軍基地として利用されているところもあります。

## 国立新美術館

歩兵第三連隊の兵舎跡地



GHQによる接収が解除された後、〈東京大学生産技術研究所〉による利用を経て、平成19（2007）年に日本で5館目の国立美術館としてオープンしました。

■六本木7-22-2

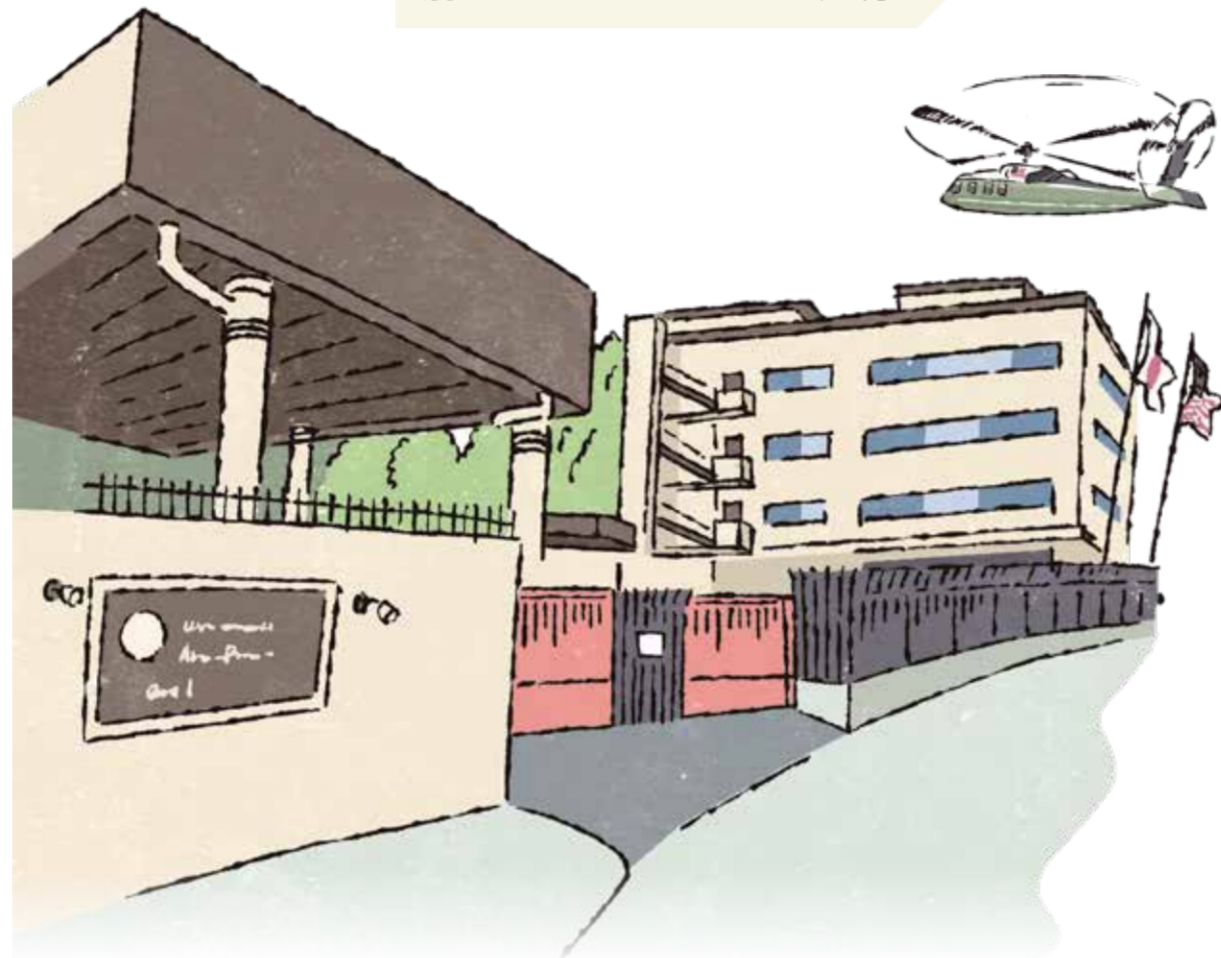
別館として保存されている歩兵第三連隊の兵舎の一部は、関東大震災後に作られた、兵舎建築としては日本初となる、鉄筋コンクリートのモダンな建物！

## 赤坂プレスセンター

歩兵第三連隊の兵舎跡地

戦後GHQによって接収され現在まで使用が続いている、在日米軍の基地で、ヘリポート等が設置されています。区内の基地には、ほかに南麻布の〈ニューサンノー米軍センター〉があります。

■六本木7-23-17



## 政策研究大学院大学

歩兵第三連隊の兵舎跡地



平成17（2005）年に新宿区若松町から移転してきた、国際的な政策研究・教育を行う拠点です。学生の約3分の2が留学生で、国立新美術館に隣接するキャンパスには、世界各国から未来の政策リーダーや研究者が集まっています。

■六本木7-22-1

## 赤坂サカス

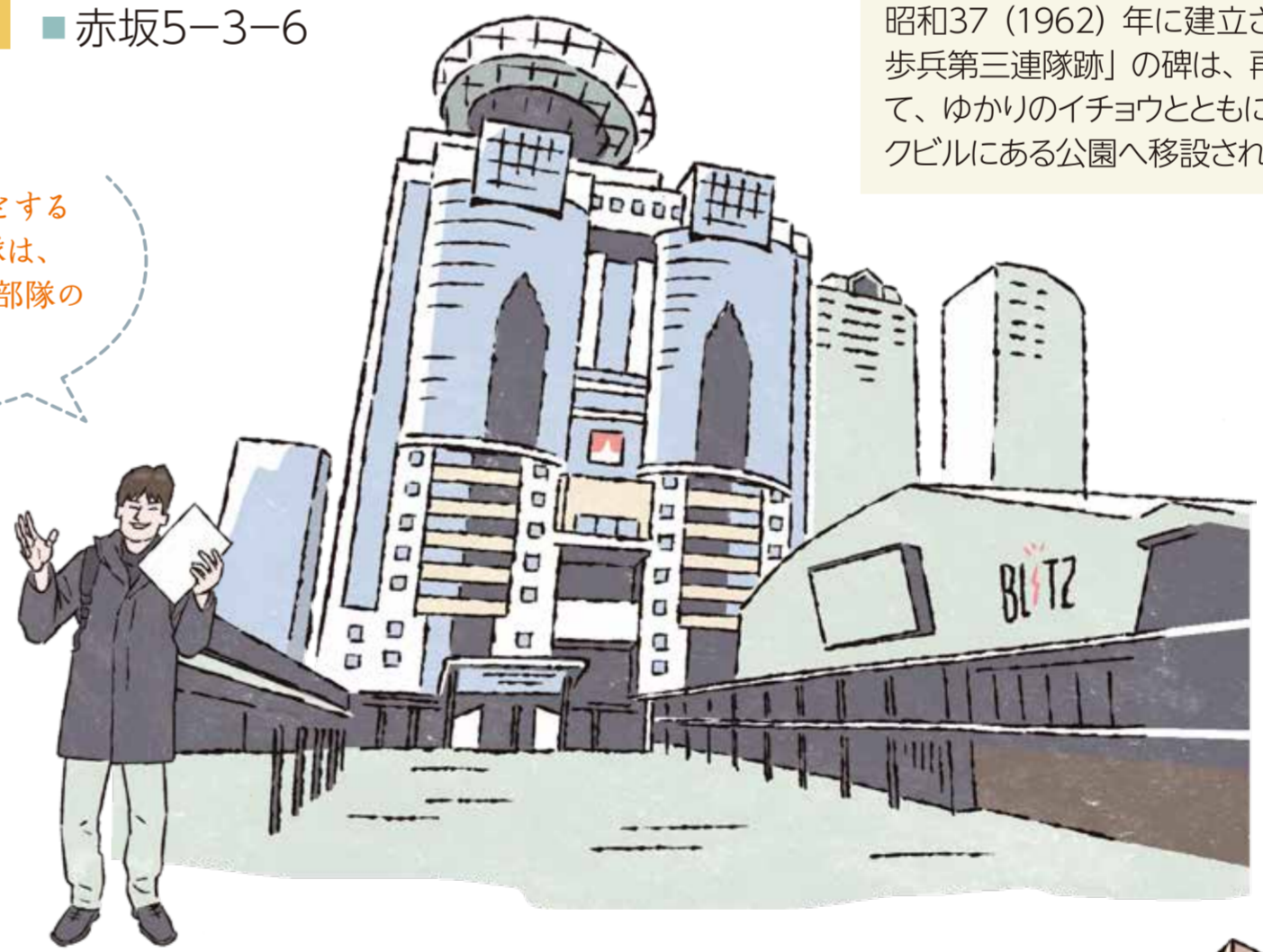
近衛歩兵第三連隊の跡地

戦後、民間に払い下げられ、〈ラジオ東京〉が昭和30（1955）年にテレビ放送を開始しています。その後、平成6（1994）年にTBS放送センターが、平成20（2008）年には再開発による複合施設〈赤坂サカス〉がオープンしました。

■赤坂5-3-6

昭和37（1962）年に建立された「近衛歩兵第三連隊跡」の碑は、再開発に伴って、ゆかりのイチョウとともに、赤坂パークビルにある公園へ移設されています。

天皇の警護を目的とする近衛歩兵第三連隊は、二・二六事件の反乱部隊の一つだね



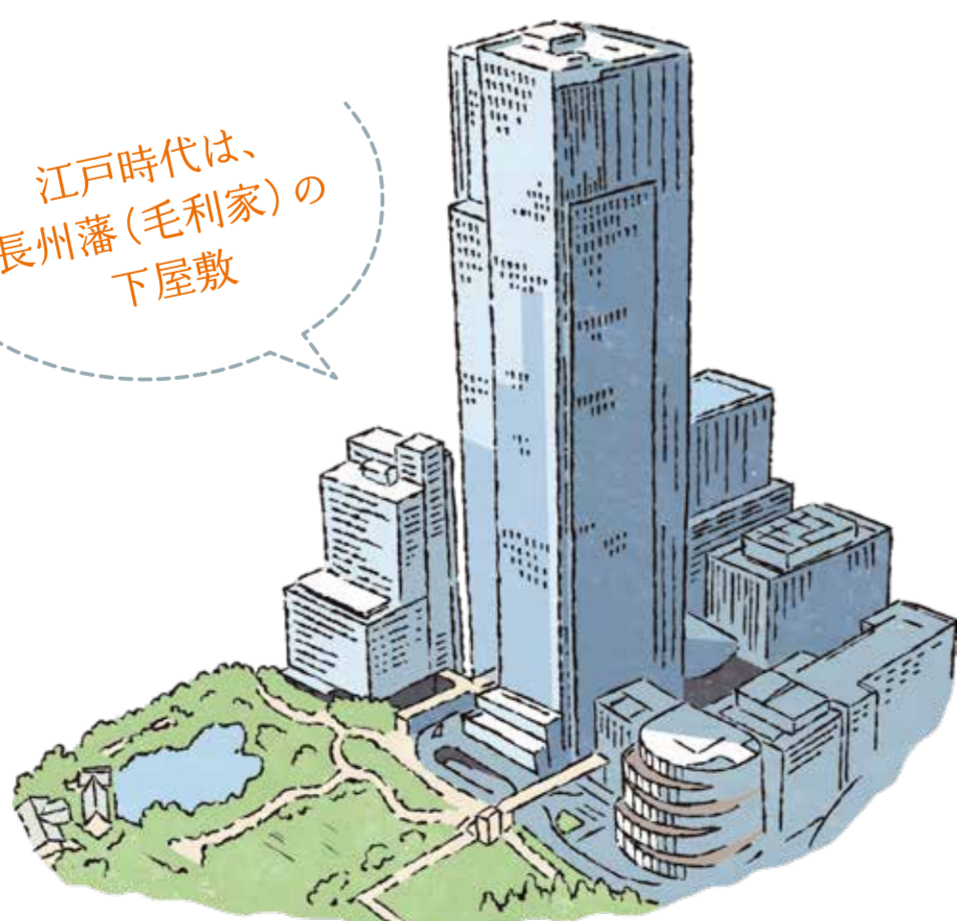
## 東京ミッドタウン

歩兵第一連隊の跡地

戦後GHQに接収されたのち日本へ返還され、昭和37（1962）年に、陸上自衛隊<sup>ひのきちよう</sup>檜町駐屯地となり、防衛庁（現「防衛省」）の本庁舎も置かれます。そして、防衛庁が市ヶ谷へ移転したのち、平成19年に複合施設〈東京ミッドタウン〉がオープンしました。

■赤坂9-7-1

江戸時代は、長州藩（毛利家）の下屋敷



〈歩一〉と通称される歩兵第一連隊は、地元出身者による「郷土連隊」として知られている、港区と関係の深い部隊ですね。隣接する歩兵第三連隊とともに、二・二六事件に参加した部隊の一つです。

## アメリカ大使館／大使公邸

明治23（1890）年、公使館が築地から当地へ移転し、のちに大使館となりました。関東大震災を経て、昭和6（1931）年、建築家のレーモンドやマゴニグルらが設計した、白亜の大使館や大使公邸などが建てられます。戦争による閉鎖をはさみ、昭和51（1976）年、現在の新大使館ビルに建て替えられました。

■赤坂1-10-5



失われた東京の日光 徳川將軍家の菩提寺の痕跡

# 芝公園周辺

1

芝公園周辺は、もともと増上寺の  
 広大な敷地が広がっていたところで、  
 明治になつて境内に公園が設けられました。  
 しかし空襲によつて、徳川家の靈廟や  
 五重塔など、建造物の多くは焼失してしまいました。  
 今、私たちが見ている東京プリンスホテルは、  
 戦後に土地が売却されて建てられたものです。



平和の女神像 ● 昭和62年3月、港区役所  
 新庁舎の開庁に合わせて設置されました。  
 作：北村西望

## 東京タワー

料亭・紅葉館の跡地

政財界の要人や軍人、文人たちの社交場として知られた、会員制の高級料亭〈紅葉館〉が、空襲を受けて焼失。その跡地へ昭和33（1958）年に建てられた高さ333mの電波塔で、当時は日本で一番高い建造物でした。

■ 芝公園4-2-8



提供：ジャパンアーカイブズ



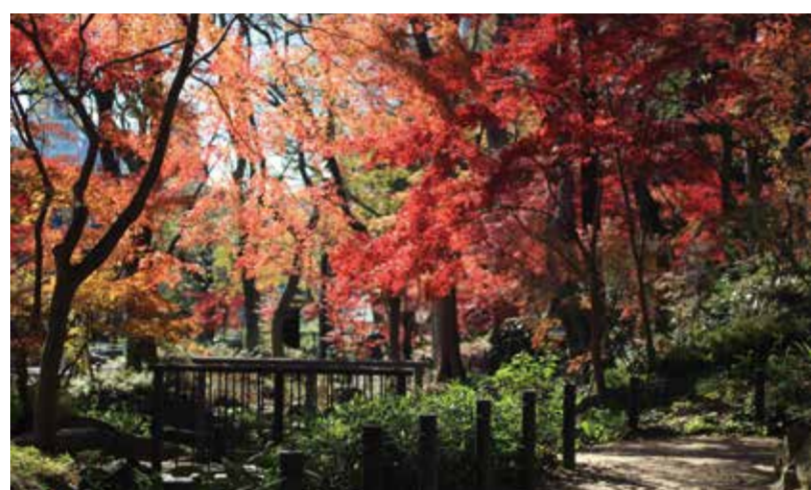
紅葉館 ● 江戸城内の〈紅葉山〉からカエデが移植されたことで紅葉山と呼ばれた地に、明治14（1881）年に開業した純和風の料亭です。当初は会員制の料亭でしたが、上流人士の社交や外国人の接待の場として用いられました。

## 芝公園

明治6（1873）年に指定された、日本最初の公園の一つ。増上寺の境内に開設され、数多くの伽藍や宝塔、徳川靈廟、東照宮などが名所となり、いくつかの政府や軍の付属機関も置かれました。空襲でほとんどが焼失したのちは、政教分離によって公園と境内とが明確に区分され、現在の姿となりました。



竣工当時のもみじ谷の滝  
 (提供：公益財団法人東京都公園協会)



提供：公益財団法人東京都公園協会

崖になった自然の地形を活かして、園内には、二段に落ちる滝、滝壺（たきつぼ）、溪流、池などの人工の溪谷〈もみじ谷〉が作られました。震災や戦災によって景観が失われていましたが、改修工事を重ね、令和2（2020）年に当時の姿が復元されました。

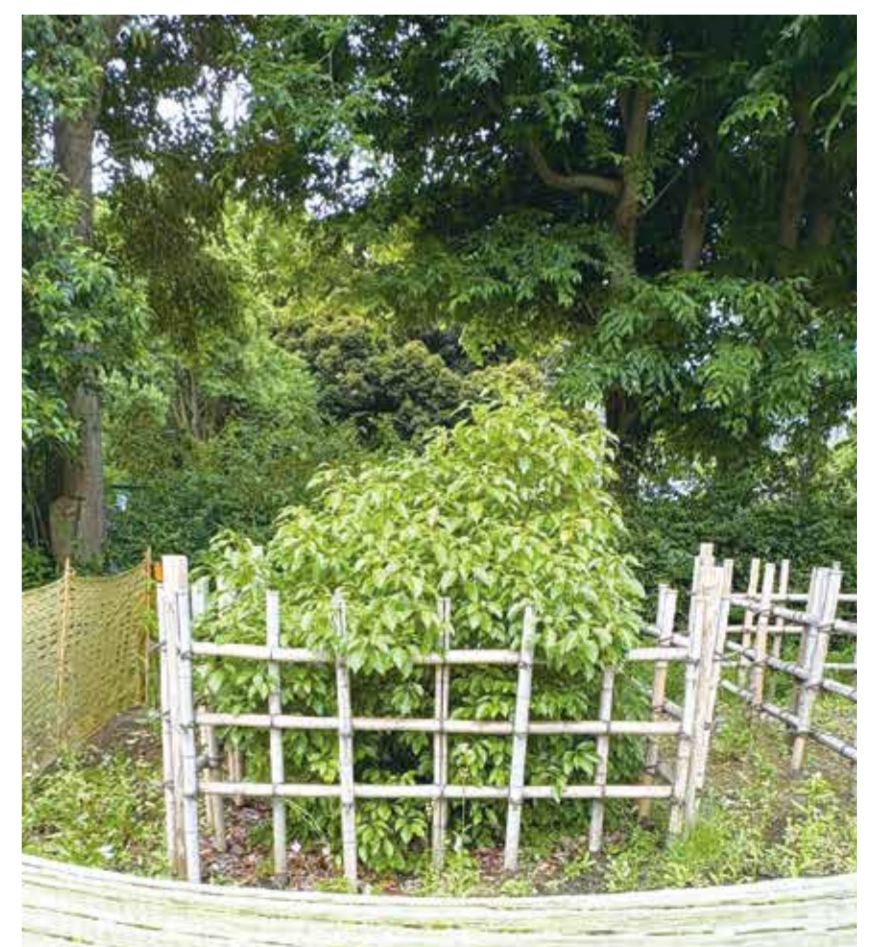


平和の灯

平和の灯 ● 平成17（2005）年度に、港区平和都市宣言20周年の記念事業の一環として区立芝公園に設置しました。「平和の灯」に灯された「火」は、広島市の「平和の灯」、福岡県八女市（旧星野村）の「平和の火」、長崎市の「ナガサキ誓いの火」を合わせたものです。「平和の灯」のデザインは、子どもたちからアイデアを募集し、そこから得られたキーワードの「地球」「火」を活用し、「水と緑の地球」に、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願う火が灯されている」様子を表現したものとなっています。



被爆アオギリⅡ世



被爆クスノキⅡ世

被爆アオギリⅡ世・クスノキⅡ世 ● 「平和の灯」の周辺には、広島・長崎に投下された原子爆弾の熱線と爆風の中を生き抜いた種から育てられた、被爆アオギリⅡ世・クスノキⅡ世が植樹されています。



## 増上寺

芝公園にある、浄土宗の大寺院。上野の寛永寺と並ぶ徳川家の菩提寺として知られ、徳川将軍15代のうち6人が眠っています。江戸時代の寺領は約25万坪にも及び、近隣の〈大門〉や〈御成門〉などの駅名は、増上寺に由来します。

■ 芝公園4-7-35

江戸時代



『東都名所〔芝〕増上寺』歌川広重画  
(提供：国立国会図書館デジタルコレクション)



増上寺 三解脱門

今も残る  
往時の姿

明治時代には東照宮が増上寺から切り離され、その後も戦災によって五重塔などが失われてしまいました。しかし、今も寺の正面に建つ〈三解脱門（国重要文化財）〉は被災を免れ、往時の姿を留めています。



<sup>れいびょう</sup>  
徳川家霊廟 ● 徳川将軍家歴代の墓所で、戦前は本堂（大殿）の左右（南北）へ広がる広大な敷地に廟や石灯籠が建ち並び、日光東照宮にも比肩されるほど荘厳なものでしたが、空襲によってほとんどが焼失しました。昭和33（1958）年に、遺体や廟の学術調査が行われてから現在の場所へ改葬され、秀忠（2代）、家宣（6代）、家継（7代）、家重（9代）、家慶（12代）、家茂（14代）の6人の将軍と、それぞれの正室と一部の側室の墓があります。

## ザ・プリンスパークタワー東京

徳川家霊廟の南廟跡地

平成17（2005）年、芝公園に開業したホテル。戦災で消失した徳川家霊廟の南廟の跡地に建てられました。ほぼ全域を台徳院（2代将軍秀忠の法号）霊廟が占めていましたが、戦災で大半が焼失。位置を少し移された〈惣門（国重要文化財）〉だけが、敷地内に残されています。

■ 芝公園4-8-1

## 東京プリンスホテル

徳川家霊廟の北廟跡地

昭和39（1964）年、東京オリンピックの開催に合わせて、芝公園に開業したホテル。戦災で消失した徳川家霊廟の北廟の跡地に建てられました。敷地内には、近年改修されて色鮮やかな姿がよみがえった〈有章院（7代将軍家継の法号）霊廟二天門（国重要文化財）〉や、現在の御成門交差点から移築された〈御成門〉が残されています。

■ 芝公園3-3-1



東京プリンスホテル前に建つ「有章院霊廟二天門」(提供：Kissポート財団)



旧台徳院霊廟惣門

敷地のほとんどが  
焼け野原となって  
しまいました



所蔵：港区立郷土歴史館



# 戦争体験の記録

昭和20（1945）年の夏から、80年。

戦前から戦中、

そして戦後へと至る時代に、

人々は何を感じてどう動き、

どのように生き抜いたのでしょうか。

『戦争・戦災体験集（第4集）』を発行するにあたり、港区内在住・在学の学生が、当時を体験した11人の方々にお話を伺い、それぞれの平和への思いを丁寧に聞き取りました。冊子は地域で起こったことや体験者の証言を、特に若い世代に向けて分かりやすく伝えるために、構成や表現に工夫をしています。本展示は体験集より、一部を編集して紹介しています。

多様な人が暮らし、多くの人やモノ、文化が行き交う「港」であるこのまちで生まれ育つ皆さんが、戦争が過去に人々の命や暮らし、選択を奪ったことを知り、平和について考え、更にその思いを様々な人とのふれあいの中で伝えていただくことを願っています。



# 疎開したのに栄養失調 「迎えに来て」と書いたはがきは 検閲で没収されました

食糧がないのに学童を送り出す  
疎開も戦争もやり方は同じ

疎開では池田さんも食べ物に苦労されたとか。

**池田**——昭和20（1945）年、小学3年から栃木の塩原温泉へ学童疎開しました。父は徴用で神奈川が静岡。自宅も強制疎開（空襲に備えて防火帯を作るために建物を取り壊すこと）で失われ、母と妹たちは草津へ縁故疎開（親族を頼って移住する自主的な疎開）。家族ばらばらの生活でした。

でも疎開と決まった時は、遠足気分であれしかったんですよ。いつも遊んでる学校の友だちと一緒にわけですから。でも楽しかったのは最初の1日か2日だけで、だんだん家族が恋しくなってきました。

もつとつらかったのが、空腹です。食糧が豊富だった疎開先もあったのかもしれないが、私たちが疎開したのは、戦争も末期。田んぼも畑もない観光地だから、地元の人でも大変なくらいで、現地調達なんてとてもできない。

戦争は人のいろんな面を暴き出すけれど、とくに飢えは人を変えてしまいます。後先

など考えられなくなり、トンボやセミも食べましたし、甘いものを求めて歯磨き粉まで舐めました。そのうえ、温泉には入れても、洗濯をする人手が足りないの、あつという間にノミやシラミだらけになって、血を吸われる。寄生虫もお腹に棲みついて、これまた養分を吸い取る。数カ月もしないうちに、私たちはひどい栄養失調に陥りました。食糧がないのに軍を送り出すのと同じことが、疎開でも行われたわけです。

親に「帰りたい」と伝えなかった？

**池田**——疎開先でも検閲があったんです。家族へ送るはがきや手紙でも、軍や国のやり方に触れることを書いたら、没収されてしまいます。私が母に送ったなかでも、「元気でおります」と書いたはがきは届きました。しかし「つらい」とか「食べ物がない」と書いたときは、届かなかったことが、後でわかったのです。

8月に戦争が終わり、学校の検閲がなくなってから、「ノミやシラミがうじゃうじゃ」「じつからここから引き取って」と書いた手紙が、やっと親の元へ届くようになった。そこで初めて「これは大変だ」と、父が迎

正しい判断をしていくには、偏りのない情報へ広く接することと、本物を見ることが大切。

えに来てくれることになりました。それでも切符がなかなか手に入らず、ようやく9月に塩原へ着いた時には、私はもう歩くことさえできませんでした。むしろを敷いた大八車（荷車）に乗せられて、長野の佐久へ移っていた家族のもとへ向かいました。あとひと月遅かったら、私は生きていたかどうか。実際、その疎開中に児童が2人、栄養失調で亡くなったそうです。



点呼と朝礼の様子。『東京都桜田国民学校集団疎開学園写真集』より（『デジタル港区教育史』公開資料）

interview | 池田 林太郎 さん …… 昭和11(1936)年、新橋生まれ



# 「近所の様子を見てくる」と、 出て行った父。 それが最後の別れになりました

message

日本は戦後80年も平和な状態が続いている。こんなにも素晴らしいことはありません。



interview | 泉 宏 さん …… 昭和5(1930)年、青山北町(現・北青山)生まれ

泉——夜10時頃に空襲警報が鳴り、まず母

と姉から先に避難することにしました。行き先は、今の代々木公園にあたる代々木練兵場。兄たちは兵隊に取られて不在ですから、家に残ったのは、父と中3の僕の2人だけ。そして、町会役員だった父も「近所の様子を見てくる」と、出て行ったのです。中略 表参道へ出ると、両側の建物もケヤキ並木も火に包まれ、風が起きて炎と煙が渦を巻き、とても代々木の方へ向かえない。それで進路を変え、青山通りに出て墓地の方へ向かおうとするのですが、その最中も火が追いかけてきて、一緒に走っている人たちが途中でバタバタ倒れていくんです。その人たちが助けることも、振り返ることもできないまま、走り続けるしかありません。墓地まで行き着かないかと諦めかけたら、途中で軍用倉庫があって、そこにいた兵隊さんが僕を中に入れてくれたのです。ただ、しばらく休ませてもらったその倉庫も、その後燃え始め、隣の赤坂青山警察署の脇にあった、建物疎開の跡地に身を潜めました。その空き地で、ある母親がお産をし、残った煉瓦塀の向こうで、何人かが身を寄せながら亡くなっているなか、朝を迎えたのです。

爆撃自体は終わったのですね。

泉——夜が明けて、まず自分の家に向かったのですが、着いたら、五右衛門風呂の釜だけが残り、あとはすべて灰になっていました。どっと疲れが出た僕は、焼け跡に寝転んでいたんですが、ちょうど戻ってきた姉は「宏が死んでいるー」と思ったそうです。

無数の遺体を確かめながら、  
こんな姿の父は見たくない  
とも思っていました

街はどんな様子でしたか？

泉——いたるところに遺体が転がっていました。ほとんどまっ黒焦げで性別不明の状態です。

ご家族とは再会できたのですか？

泉——姉と一緒に母を探していたら、青山通りで会えました。表参道で火に追われた母は、手と胸にやけどを負いながら、交差点にある山陽堂の本屋さんに助けももらったそうです。コンクリート造りの建物は、もう人でいっぱいだったのに、知り合いが中へ引き込んでくれたのです。姉と

僕は、母を近所に託して、父を探しに行きました。表参道の安田銀行(現・みずほ銀行)の脇にできていた遺体の山や、道端の防空壕、マンホールの中、避難所などあらゆるところを探しましたが、遺体も足跡も見つかりませんでした。真っ黒に焦げたり、真っ白な蝉人形のようになったりした遺体を、一人ひとり確かめているうちに、こんな姿の父を見たくない、という気持ちも湧いてくる。それほど、どの遺体も無残でした。見つかってほしい、いや見つからないでほしい、という相反する思いを抱えたまま、ずっと探し続けました。参道で見かけたという情報だけは得られたものの、ついに、父は戻ってこなかったのです。



昭和6(1931)年の山陽堂書店  
(提供：山陽堂書店)





interview | 井上 繁<sup>いの上 しげる</sup>さん …… 昭和7(1932)年、田村町(現・西新橋)生まれ

# 「なぜこんな死に方を しなくてはならないんだろう」 大量の焼けた遺体に 呆然としました

焼けただれて歩く人々と  
大通りのあちこちに転がる焼死体

翌月の5月25日にも山の手に空襲がありました。その時はどうでしたか？

**井上**——都心一帯が大きな被害を受けたのがこの日の空襲です。来襲した500機以上ものB29がばら撒いた焼夷弾で見渡す限り火の海でした。それまでの経験で、前に焼夷弾を落としたところには二度と落とさないことがわかっていましたから、焼け跡に移動し、空襲が終わるのを待っていました。

夜が明けてからどうされましたか？

**井上**——学校に行きました。麹町から青山、赤坂方面は全滅したという噂が流れており、私の通う中学校がその方面にあるので心配だったのです。

路面電車(都電)は動いておらず、徒歩で学校へ向かいました。虎ノ門の交差点を左折すると、溜池方面からゆっくりと歩む被災者の長い行列に出合いました。その異様な風景、全員が無言でうつろな表情、顔や手足や着衣は煤けている。煙で目を痛めたのか、布で目の周りを鉢巻状に覆い、人に手を引かれて歩く人も大勢いました。

学校に着いて目にした状況は、校舎の半分が焼かれ、体育館は全焼し

ていました。登校して来る者は皆無だったので、校舎に別れを告げ、赤坂見附方向への坂を下りました。

外堀通りに出ると、300体ほどの焼死体があちこちに転がっていました。広い通りの真ん中でなぜこんな真つ黒焦げなのか不思議でしたが、弁慶橋方向へ逃げて助かったという人が、「炎が道の両側から中心に向かって地面を這ってるんだ。その勢いときたら凄かった」と話をしてるのを耳にして納得したのです。

赤坂見附の都電の停留所には、正規の線路に並行して別に待避線があったのですが、その線路上に燃え尽きた2台の車両が並んでいるのが目に入りました。近づいてみると、両方の車体の梁の上にはどちらにも十数体の焼死体が横たわっていました。話は道路上へと戻りますが、炎から身を守ろうとして畳を背負って逃げるつもりが逃げ切れず、畳を背負ったまま亡くなっている人がいました。畳からはみ出していた上半身は真つ黒焦げ、集まって来た人が畳を持ち上げたところ、下半身は着衣も焼かれることなく生身のままでした。「なぜ、こんな惨めな死に方をしなくてはならないんだろう」と、焼死体を呆然と眺めながら思いました。



赤坂区役所付近の焼跡(撮影:石川光陽)

## message

悪いことが起きても絶望するのではなく、現実をしっかりと受け止めて対処法を考え、力強く生きていかれることを願っております。



# 負けることを予想していた軍の内部 豊富に蓄えられていた物資を 将校たちは要領よく持ち帰っていった

message

好きな仕事をして、家族を持って、幸せに生きていくことを望んでいる。それなのにどうして戦争が起きてしまうのか、しっかり考えてみてほしいですね。



## スコールのような焼夷弾

### 兵器というより

### 恐ろしい生き物のようだった

川崎では、どんなところへ行かれたのですか？

**可児**——扇島にある昭和電工です。本来は肥料を作る工場ですが、その原料である硝酸とかアンモニアとかは、火薬の原料でもあるから、軍事に転用できるわけです。国産技術で初めてアンモニア合成に成功した工場でもあり、重要な拠点だったんですよ。

空襲は、そこで体験されたのですか？

**可児**——3月10日に下町を襲った、いわゆる東京大空襲は、川崎から見ました。東の空が真っ赤になって、大編隊のB29が黒いシルエットで飛び去っていききましたね。それから、何度か空襲がありました。とくに4月15日の空襲（現在の品川区や大田区が被害を受けた城南大空襲）では、川崎も大きな被害を受けました（川崎大空襲）。防空壕の上にも、焼夷弾がスコールのように降ってきて、屋根や壁へめり込むように付着するんです。

ほうきやハタキの柄の先に縄を何本もくくりつけて、付着した焼夷弾を払い落とそうとしても、とてもおっつかない。そのうち焦げたような異様な臭いを発しながら、油脂が噴き出し爆発するんです。兵器というより、恐ろしい生き物のようでした。

被害は大きかったですでしょうか。

**可児**——炎から逃げ惑う人たちが、川や運河で大勢亡くなりました。水に飛び込めば助かるのではと、どんどん飛び込むけれど、水も熱くなってしまっていて、下へ押し込められた人から亡くなってしまふ。水の中で遺体が折り重なっていました。しばらくすると、遺体がボロボロになってしまい、骨だけでも何とか引き上げられればという状況で、とにかく悲惨でした。

終戦はどこで迎えられたのですか？

**可児**——降伏のラジオ放送は、造兵廠で聞きました。でも悲壮感はまったくなかった。そうなることは、みんな予想していましたから。お酒が山ほどあったので、「これでようやくうちに帰れるんだ」と、みんなで飲んで騒いで喜びました。

陸軍は、負けることを知っていたのですか？

**可児**——造兵廠には、戦争のいろんな情報が早くから集まってくるんです。そもそも兵力が比べものにならず、兵士も国民も大事にされず、みんな飢えに苦しんでいた。とても勝てるはずのない戦争なんか、しちやいけなかったんです。将校たちは、造兵廠に蓄えられていた豊富な軍の物資を、要領よく故郷に持って帰っていきましたよ。



interview | **可児 忍** さん …… 大正13(1924)年、千葉県佐原町(現・香取市)生まれ



昭和電工川崎工場本事務所(国登録有形文化財/提供:株式会社レゾナック川崎事業所)。昭和6(1931)年に建てられた、昭和初期の工場事務所建築の代表的な様式で、内部には、吹き抜けの階段やステンドグラスなどの意匠が施されている



# 焼け残った椅子と 欠けた鏡を空き地に置いて 青空床屋を始めたんです

水戸から見えた真っ赤な東京の空  
翌朝に舞ってきた、  
空襲の燃えカス

東京大空襲のことを覚えておられるそうですね。

interview | 河村 弘一 さん …… 昭和16(1941)年、白金志田町(現・白金)生まれ



**河村** — ある夜、母が緊張した声で「起きなさい、起きなさい」と言っただけです。外へ出て東京の方を見ると、空が真っ赤でした。時々ピカッピカッと光ったのは、後から考えれば、B29のジュラルミンの機体が、地上の爆発や炎を反射してたのかもしれないですね。その時は、何が起きてるかよくわからなかったけれど、あくる日、起きて家の前の畑に行ったら、ひらひらひらひら、燃えカスみたいなものが空から落ちてくるんです。一晩かけて、東京から飛んで来たんでしょうね。その中に、当時の高額紙幣だった10円札の半分焼けたのがあったんですが、近くにいた大人がすぐ持っていくてしまいました。

水戸も空襲を受けたのですか？

**河村** — 日立に大きな軍需工場があり、水戸にはその下請けをする工場があったし、常磐線の輸送基地でもあったので、終戦間

際の昭和20(1945)年8月2日に大きな空襲に遭ってます。まだ4歳でしたが、日本の戦闘機が迎え撃つのを防空壕から見た覚えがあります。大人たちが「あれは隼だ」と話してましたね。(中略)

戦争が終わってどうされましたか。

**河村** — 終戦から1週間くらいで、母と東京へ戻ってきました。田町駅で降り国道へ出ると、進駐軍のトラックやジープが何百台も、昼間から煌々とライトを点けて、品川の方から新橋の方にかけて走っていきました。兵士たちは姿勢を崩し、車から足を投げ出しててね。それまで、規律正しい日本の兵隊さんしか見てなかったから、「なんて行儀が悪いんだ」と驚きましたよ。

ご自宅は変わっていませんか。

**河村** — ここから渋谷の東急百貨店が見えるくらい、一面の焼け野原になってました。高い建物といったら、北里研究所のとな

message

平和な国、平和な時代に生まれたことの意味を、しっかり受けとめ、考えてほしいと思いますね。



河村さんの母と、幼い頃の河村さん(写真右)。左は乳母と河村さんの双子の弟・保弘さん



昭和30(1955)年頃の白金の理容店



平成5(1993)年頃の白金の理容店

ある時期、ベントレー(イギリスの高級自動車)に乗った白人が、店の前の通りをよく走っていたんですが、サングラスをかけ、とにかく格好が良かったですね。あとで人から聞いたところでは、東京裁判のために白金三光坂の服部ハウスに滞在していた、イギリス人の関係者だったそうです。

がり屋根と広尾病院、慶應幼稚舎の白い建物くらい。自宅もちろん、跡形もなく焼けていました。そんなところでどうやって寝泊まりしたかわかりませんが、たぶん廃材やトタンなんかを組み合わせてバラックを建てたんでしょうね。  
道を渡った空き地に、焼け残った椅子と欠けた鏡を置いて、祖父が青空床屋を始めました。人間の髪は、何があっても伸びるからね(笑)。すぐに仕事を始められたのは、この商売のありがたいところかも。



# まわりで燃える焼夷弾の火を 端からスコップで叩いて 一生懸命に消しました

**「日本は本当は  
負けているよなあ」と友だちと  
こっそり話していました**

**高橋**——軍事教練は市立八中（現・小山台

高校）に入ってから始まりました。各学校に配属将校（教練のために学校に派遣された将校）がいて、戦場で必要なことを教えるんです。弾の入っていない古い三八式歩兵銃（三八式歩兵銃）というのが皆にあてがわれ、銃の手入れの仕方や、匍匐（腹這い）になって進む訓練、ゲートル（膝から下に巻く布）の巻き方、負傷兵の運び方、整列行進など、兵隊さんがやることを一通り教えられました。怒鳴るような怖い教官ももちろんいましたよ。

**みな素直に訓練を受けていたのでしょうか？**

**高橋**——それしか心のよりどころがなかったんです。戦地では男性たちが戦っている、内地では女性が銃後を守り、子どももお国のためにできることをしなければならぬ。それが当たり前のことでした。国の方針に反すれば国賊と言われ、警察や憲兵に怒られます。変だと思っても公には言えません。

友人とは「日本は本当は負けて攻められているよなあ」などこっそり話していましたが、昭和20（1945）年3月10日の大空襲の時のことを教えてください。

**高橋**——その日は北風が強い日でした。夜、B29が4機頭上に飛んできたのを覚えてます。飛行士の顔まで見えた気がするほどの低空飛行で、焼夷弾をバカバカ落としていきます。焼夷弾の中身は油なので、落ちる途中で何かに付着すると火が出るし、着弾した地面でも燃えます。私はまわりで燃える火を端からスコップで叩いて一生懸命に消しましたが、北風による火の回りはあつという間でした。近くの木造家屋が燃え上がり、神心小学校からも火が上がってきて、熱気もすごかったので、もうこれはダメだ、と祖父や両親とともに、普段は一般に開放していなかった伝染病研究所（現・東京大学医科学研究所）へ逃げて、夜が明けるまでそこで過ごしました。家からは何も持ち出せませんでした。水をかぶることもできず、熱い中を走ったことを覚えています。

**自宅はどうなったのですか？**

## message

社会のため、人々のためになることをしていただきたい。そして自分だけでなく他者の幸せも含めた、平和で豊かな世界を作ってもらいたい。



**高橋**——夜が明けて戻ると、自宅も近所の建物も全部燃えてぺしゃんこ。炎がぼろぼろ残っているだけでなんにもない。造園の道具なども残っていませんでした。親たちはこれからどうするのだろうと思いましたが、それを口にするのささやばかられたね。ただ、これからどんなに苦しくても一家で生活していけるなら我慢しようと思えました。



はっぴ姿で初孫を抱く高橋さんの父。昭和36（1961）年



有栖川宮記念公園 太鼓橋（出典：『東京市公園概況』昭和11（1936）年、提供：東京都立中央図書館）

※東京大空襲時のB29の高度は2000メートル



# 芋で作った飴を運び 問屋の間屋で売りさばいたお金で 家族みんなが生き抜いたんです

戦争が終わって2年してから、東京へ戻られたそうですね。

**武**——父が簡易保険局を辞めてしまい、仕事を探して仙台と東京を往復してたんですが、戦後の混乱期ですから、なかなか見つけられなかったんです。やむなく東京の親戚の家へ、家族5人でひとまず身を寄せたことになりました。小学5年から6年の時だったと思います。

父は、三男一女のきょうだいだったんですが、いちばん上の伯父が、**目黒線**（現・目黒線）と池上線の間**の矢口**にある実家を継いでいました。ここがたいへん広い家ですね、もとの長男一家に加え、岡山から引き揚げてきた次男坊の一家、続いて三男坊である父と私たち、さらに親戚のおじいさんとおばあさんという、合わせて4世帯がしばらく一緒に生活できるほどだったんです。  
（中略）

ご家族で、飴を作っていたこともあるそうですね。

**武**——伯父の長男、つまり私の従兄が軍隊から帰ってきて、友だちと始めたのが飴屋の仕事。これが当たったんで、職がなかつた父も一口乗ることになり、私も手伝うようになったわけです。

た父も一口乗ることになり、私も手伝うようになったわけです。

矢口の家は庭に作業場を建て、仕入れて来た芋飴（サツマイモと麦芽から作った飴）を、大きな鍋で煮るんです。そうして溶けた飴を、壁の**犬釘**（先端がL字に曲がった大きな釘）へ引っかけて長く伸ばす。そうやって**晒す**と、空気が入って飴が白く柔らかくなっていくんですよ。これを何度も繰り返してから棒状にして、トントントンと一口大に切って、小さな飴をこしらえる。

□に入れた時にサラッと溶けるこの「晒し飴」を、錦糸町や上野、日暮里あたりの飴の間屋へ持ち込むと、それはもうよく売れたんです。砂糖を使ってない、芋の素朴な風味の飴なんです。みんな甘い物に飢えている時代でしたから。

問屋街は活気がありそうですね。

**武**——駅前マーケットができて、問屋も多かったんですが、近郊からたくさんの方が集まって、あらゆるものが取引されました。晒し飴を売ったお金で、食料や物資を買うことによって、私たちは生き抜いたんです。そのうち砂糖の配給が再開され

## message

「おいしい」「知りたい」という自分の気持ちを大切に、いろいろな意見を聞いて、自分で考える人になってほしい

たんですが、「砂糖だけじゃ腹の足しにならない」と手放す人も多かったそうです。父や母は、大森の山王あたりのお金持ちから砂糖を少しずつ集め、まとまったところで飴問屋に持ち込むこともしてたそうです。「担ぎ屋」の人も大勢いましたよ。そんな生活を、小学6年から中学2年あたりまで、3年くらい続けたかなあ。



〈港区語り部の会〉では戦争中の経験をもとに、メンバーが制作した『みよちゃんの集団疎開』という紙芝居で、ナレーションを担当している

interview | **武恒雄** さん …… 昭和9(1934)年、福岡県生まれ



# いつでも白いご飯を 好きなだけ食べられる そんな幸せなことってないんですよ

message

いろんな国の人たちと  
会って、話して、それぞ  
れの考え方や暮らし方  
について知ることが大事。



**楽しみにしていた遠足のおやつ  
配給されたのは、  
氷砂糖が5、6粒だけでした**

**中嶋**——近所には下駄屋さん、衣料品屋  
さん、お菓子屋さん、いろんな商店があり  
ましたよ。氷屋さんでは、太鼓焼というあ  
んこが入った焼き菓子を売っていて、買い  
に行くとも「いつも来てくれるから」って、  
あんこをおまけで上に乗せてくれるのがう  
れしかったですね。

街には、おいしいものがいっぱいあったの  
ですね。

**中嶋**——ただ、私が生まれた翌年にはも  
う日中戦争が始まって、実は東京ではだん  
だん食べる物が足りなくなっていたんです  
よ。配給されるお米も、太平洋戦争が激し  
くなってからは、ヌカが付いたままの玄米  
になってしまったので、瓶に入れて棒で何  
度もついて、自分たちで精米しなければな  
りませんでした。

そのうちに玄米の配給さえ少なくなり、  
かさを増すために、おかゆにして食べるこ  
とが多くなりました。お行儀がよくない話

だけど、ふうのおかゆなら、お箸を刺せ  
ば立つでしょう？ でもお米が少ないゆる  
ゆるのおかゆでは、倒れてしまう。「今日、  
うちのご飯はお箸が立つか、立たないか」  
ということが、子どもの間でも話題でした。  
食べざかりの子どもが多かったから、ど  
この家でも、お母さんはやりくりが大変だっ  
たでしょうね。今のように、白いご飯がい  
つでも好きなだけ食べられるのは、本当に  
幸せなことなんですよ。

そうすると、お米やお菓子も……？

**中嶋**——お米すら口に入らないんですか  
ら、お菓子なんてとんでもない！ 小学校  
に入って初めての遠足のとき、学校から「お  
菓子券（菓子類を購入できる配給切符）」とい  
うのをもらったんですよ。それを持って和菓  
子屋さんへ行ったら、渡されたのは、ちっ  
ちな紙袋に氷砂糖が5、6粒だけ。それ  
でも、甘い物なんて他になかったから、家  
族と分けあって大事に食べたのを覚えてま  
す。配給切符にもいろいろ種類があつて、  
肌着や運動靴も「衣料切符」がなければ手  
に入らなかったんですよ。（中略）



昭和17(1942)年に発行  
された菓子購入票  
(所蔵：港区立郷土歴史館)

ご実家は、どんなお仕事だったのですか？

**中嶋**——室内装飾の裁縫業というカーテ  
ンなどを作る仕事で、自宅の近くにもう一  
軒、ミシンを置いて工員さんが働く作業場  
も持っていました。ただ、戦時中は、灯火管  
制のために窓を覆う暗幕を作ることが多く  
になりましたね。光をしっかり遮るには、布  
を二重合わせにする技術が必要だったから  
です。

interview | **中嶋 房子** さん …… 昭和11(1936)年、田村町(現・西新橋)生まれ





| interview |

 なかにし じゅいち  
**中西 寿一**さん …… 昭和14(1939)年、青山南町(現・南青山)生まれ

# 焼き払われた自宅の跡に シンクとジャムの缶だけが 残ってました

**防空壕に入っていた人たちは  
みんなやられてしまった**

実際に空襲に遭われたのは、いつですか？

**中西**——昭和20(1945)年の5月25日、6歳の時。いわゆる東京山の手大空襲だね。焼夷弾が降ってきて、おふくろと弟と3人で防空頭巾をかぶって逃げました。うちの父親もそうだけど、働く世代の男は、その頃たいいてい戦地に行かされてたから、まわりで逃げるのは、たいいてい女と子どもと高齢者ばかり。夜だから足元は暗くてよく見えないけど、いたるところで火が燃え盛ってる。そんな中を右往左往しながら、大勢の人が逃げ回ってるわけですよ。今の代々木公園のあたりは、陸軍の広い練兵場だったから、表参道からそっちへ逃げる人もいたけど、俺たちは青山墓地の方に向かった。赤坂青山警察署の前にあった防火用水の水を頭巾の上からかぶって、必死で逃げたね。

どうして防空壕へ逃げなかったんでしょうか？

**中西**——それがなぜだかよくわからないんだけど、近所に住んでた誰かが先に中へ入っていたんじゃないかな。だから、どこか他へ逃げるしかなかった。でも、その防空壕は結局潰れてしまい、中にいた人は全員亡くなってたんです。

そんな……。

**中西**——もしあの時、俺たちも防空壕へ逃げていたら、家族もろとも死んでたんだろうね。たまたま運が良かっただけのこと、戦争ってほんとに恐ろしい。

街や人は、どんな様子でしたか？

**中西**——青山墓地へ逃げながら渋谷の方角を振り返ったら、火の手が上がるのが見えました。逃げられなくて暴れる馬も見ただけど、あのあたりに馬を飼うところなんてないし、どこにいた馬なんだろう。あるいは軍馬だったのかなあ(当時、警察の厩舎が青山にあった)。後になって、青山通りには遺体がたくさん並んでたと聞いたけど、自分の記憶にはない。ただ、道ばたで女の子がうずくまって亡くなったことは、よく覚えています。

夜が明けて、どうされたんですか？

**中西**——戻ったら、すっかり焼け野原で、家も何もかも焼けちゃった。でもね、台所にあったシンクと、その下にしまったジャムの缶だけが残っていたんですよ。今なら、甘いものなんて当たり前に食べられるけど、あの頃はほんとに貴重だね。避難してるときに「戻ったら食べようね」と母親に言われ、楽しみにしてたジャムなんです。なのに、缶だけ残り中身はなくなってた。まさかみんな焼けてしまうなんて想像もしてなかったから、すごくショックだったな。

## message

「私はこう思う」と胸を張って言う一方、相手の考え方にもしっかり耳を傾けてほしい。



幼い頃の中西さん(写真左)と母と弟、昭和16(1941)年頃



# 川へ向かうか、山へ向かうか 燃えさかる下町を逃げながら それが命の分かれ道となりました

message

政治と私たちの日常がどうつながっているかを、いつも考え続けることが民主主義



3月10日の下町空襲、いわゆる東京大空襲

の日も、浅草にいたんですか？

の粉を避けました。

で道をあけてくれました。

**廣瀬**——隣家の子どもたちと防空壕ぼうくうこうで寝ていたら、隣のおばさんの「早く出ておい

逃げているときは、どんな気持ちだったのでしょうか？

その憲兵は、親子を逃がしてあげたかったのでしょうか？

で！逃げるんだよ！」という悲鳴のよう

**廣瀬**——そのときは、何も思いません。

**廣瀬**——私たち6人の子どもたちに生き

な声。少しの食糧が入ったリュックを背負って飛び出すと、すでに辺りは火の海で

逃げることで精いっぱい。まわりで次々と人が死んでいくのを見ても、何も感情

延びてほしい、と思ったのかもしれないね。上野の山には、近所の人みんなで作った

した。家の前の道は炎でふさがれていたの

が湧かないんです。映画のシーンを観ながら走ってるような感じだったかもしれ

なくて、ようやく体中の血が動き始めるのを感じました。ああ、生きてるんだ、と。

で、裏側の竹柵を壊し、火の手のやや薄い

道から近くの酒蔵に避難したけれど、すぐに蒸し焼きになってしまいました。ここで

を

で炎をかいくぐり、当時から道幅の広がった

逃げきれたと思えたのは、いつでしょうか？

を

浅草通りまで出ました。母や隣の家族と

**廣瀬**——上野公園の山に着いた時でしょう

を

菊屋橋に立ち、隅田川の水の方か、上野の

うか。でも、その手前の上野駅には、憲兵が立ちふさがって、駅は敵機の標的に

を

山（上野公園）の方が、どっちに逃げたらいいの？

なってるから中を通ってはならない、と言

を

と言ったんです。誰も「どうして？」とは

うんですよ。駅を抜ければ、すぐ上野の山に行けるのに、迂回うかいすると時間がかかっ

を

聞かなかったけれど、翌日に通りかかると

てしまう。そうして問答してる間にもまわりで人が撃たれてるんです。憲兵に逆らっ

を

隅田川は溺死体でいっぱいでしたから、命

たら殺されてもおかしくない時代だったけど、母は決死の覚悟で「生きるか死ぬか、

を

拾いをしたことになりましたね。

私たちが決めます！通してください」と

を

いろいろな物が燃え落ちてくるので、6人

叫び、無理に突っ切りました。憲兵は無言

を

の子どもは、2人ずつ手をつなぎ、2人の

置いてあった防火水槽の水をかぶっては火

を

interview | 廣瀬 房代 さん ..... 昭和9(1934)年、浅草生まれ



空襲で焼けた浅草の街。浅草松屋の屋上より(提供:東京大空襲・戦災資料センター)



# もっと数学を勉強したい！ せつかく進学した東京での学びは、 戦争で絶たれたけれど……

message

今の平和な日本で、好きな勉強を好きなだけできる幸せを、ぜひとも感じてください。



**念願の学生生活も、空襲で授業は中止。クラスごと、農村へ動員されてしまいました**

授業は行われていたのですか？

森——戦争が激しくなって、授業も満足にできなくなりました。2年生の終わる頃から、今のように3年で使いそうな本を買っておくように」と言われ、友だちと神保町へ数学の専門書を買に行きました。結局、使うことはなかったんですけど、それが今も大切にしている数冊です。

でも、ドイツ語はともかく、英語は敵性語(敵国の言語)だったのでは？

森——そう、英語を大きい声で読むと、外に聞こえたらどうすると叱られたんですよ。ついには、英語の授業はなくなりましたね。3年からは勤労働員に行かされ、勉強もほとんどできなくなりました。

どこに動員されたんですか？

森——クラス全員がまずは陸軍の兵器補給廠に動員され、戦地に食糧や兵器を送る仕事をしました。兵隊さんが威張っている

て、何かという怒るの。兵隊さんとすれ違う時は立ち止まって「頭、右(頭を相手の右方へ向ける敬礼の仕方)が決まり。きちんとやらないと怒られました。

次は群馬県の赤城山の麓にある、富士見村(現・前橋市)への農村動員でした。(中略)

戦後は、学校に戻られた？

森——8月に戦争が終わったら、9月には繰り上げ卒業。もう勉強はできませんでしたが、卒業できたことはうれしかったですね。

すぐに、高崎高等女学校の数学教師として配属されたのですが、半年だけでした。あまりにも食糧事情が悪かったからです。そして、再び東京に戻ってからは、学制改革もあり化学、理科なども教えていましたが、やはり好きな数学に絞りたいくて、東京女学館高等学校の数学教師になりました。

東京でも配給は乏しく、食べ物にはずいぶん苦労しましたが、教師でしたからヤミ物資には手を出さずに耐えました。

ようやく夢を叶えられたわけですね。

森——さて、どうでしょう。本当は、大



東京女子高等師範学校1年生の森さん(写真左)。昭和17(1942)年4月

神保町で買ったドイツ語や英語の数学の専門書

学に入り直してもっと数学を勉強したかったですよ。戦後は、東京大学も共学になったので、私も挑戦して数学を勉強したかったけれど、親から、もう学費を出すのは難しいと言われ、諦めました。

interview | 森 信子 さん …… 大正14(1925)年、栃木県の鹿沼町(現・鹿沼市)生まれ

